

秋の手のひら

『新壘』
66-1号

手のひらのくぼみに享けて殷すまじ敬ひ畏れて待ち
し俸せ

幸せの器をおもふ手のひらの窪みに載せおく重たかり
し不遜

今日過ぎて明日も超えなむ寂しさか電話ボックスの
孤独の灯り

吹かれきてひそひそ落葉の眩きをふと聴きとめし独
りの黄昏れ

葉牡丹を抱きかかへて幾日か根付かぬ薄紫さみしくて

冬の夕映

『新壑』
66-2号

さしのぶるてのひらいつばいに享けてゐる夕映えといふ
明日のあるものを

栄光はベッドに重く置かれるる人間さながらの青き植
物

死といふは糞はねど徐々にして軀の夕落にみえくるさ
びし

頼らずに生き来し生活の乏しさを支へてながき世の
雪・月・花

家族といふ語のながき喪失針きしませて物を縫ふ冬の
灯下に

冬の陽だまり

『新壑』3
66-3号

陽だまりに溶けゆく雪の脆くしてあるかなきかのわが
意志ゆるぶ

し
ほどほどに小壘に充たす倅せのその量感も確かめがた

あとやさき通夜に連れだつ雪径に今のえにしと歩幅を
合はす

みぬ
海ふたつ隔てて寂しき距離ながら唯一繋がる空になご

松ふ
老いの意地捨てねばならぬ頃合と櫛にまつはる白髪を

罇はしるグラスに注ぐ冬の氷零るるよりほかなきも当
然

誰からも忘れられたくありしなり孤独深むるきさら
ぎの夜

どこまでもひとつの言葉つきつめてあなさましもよ雪降
る気配

日だまりに溶けゆく雪の脆くしてあるかなきかのわが
意志ゆるぶ

ひとひらの雪にも命あるものと掌に受け融けゆくまで
を

冬のシグナル

『新壑』5
66-5号

冬の鬱やうやく霽れて伸ばす軀にどこまでゆきても赤
きシグナル

透明に且つ浄きものこそこれぞ冬の真水に萁を洗ふ

吹き荒れし風の残しゆく静寂に頭蓋をくぐるは差し
き水音

篠懸は気丈に鋭く枝を張る纏ふものなく裸で立つゆ
ゑ

頬を突き吹雪く夕べの戻り道後きくる犬をやさしく
帰す

死とさくら

『新壑』
66-6号

野は寡黙ひたすら堅雪踏みゆきぬ貫くほどの意志も
あらざり

浴槽より溢れいづるは湯の余剩わが久落の軀を充たす
と

人逝きてややに翳れる冬の窓鬱の重さの堪へがたくて

桜花の下死者を喚び寄せ語らむかこの世のさくらあの
世のさくら

風あらぬ冷氣の中に度ましくいまひとひらの桜花は散
りたり

桜花の径

『新壑』
66-7号

鬱々と人を葬る径ながら容赦なくして桜花の明るさ

桜花待たず逝きたる人を哀しみぬ涙を添へて一枝を
たむけむ

園中にほんのり浮かぶ著莪の花かかる気高さに無縁の
ふたり

逢ふ意味も逢はざる意味も喰ひ違ひ等しく雨に打た
れてゐたり

父の蹠 蕾なる血をひきつげば即ち蹠鬱トニネルを抜
けむ

春の種子

『新墾』8
66-8号

蟻の縦列の嚴肅さを見たる既に喪なはれゆくものを
思ひ

向日葵の種子地に埋めてわが日々の貫くほどの明るさ
は何

不在すら忘れられたる家の中蹟く程の昏らさをさぐ
る

死者ら置き長き不在に帰り来て点す蠟の灯のかなし
みの色

愚かにも紫陽花の像崩せるはわが失意ゆゑと頬に手を
当つ

手の甲を返せばつまりたなごころ紫ふかくあぢさる太
る

夕闇のひっそり泛ぶ花あぢさる耳欠け鼻欠けただのの
つへらぼう

夏の坂脚もと暗く下りつつ行きつくところの或いは奈落

大空を捉へむと双掌のばしたり地を這ふものつたな
き意地は

有形無形なべて稀薄の念ひにて手触れてたしかめむ
もの吾れとわれ

振り子時計

『新壘』
66-11号

わが裡にいつぱんの樹は育つとも夏太々と向日葵の花

秋陽ざしたわわの柿のはほ笑みは昨日の午後よりなほ
若くして

奏でるはかなしき旋律売り家の一室に置かれし漆黒
のピアノ

顛顛を掠める疑念に終日ひたすらなる時計の振り子

老いの意地みづから赦す羞らひは深夜の湯船に身を沈
めたり

吾亦紅
『新壑』
66-12号

暗紅のひたふりなりき吾亦紅沈黙とふ価値の深まり
ゆく秋

吾亦紅またもつきつむる野の径よふたりに還る謂れも
なくて

吹き渡る秋ふかき風の透明感われには戻す記憶あら
ざりき

削りゆく鉛筆の香のやさしさに包まれながらわが孤
独は愚図る

秋雷は木犀の香も巻きこみて自暴自棄なる天の怒号
とも